

●小学生の部

環境大臣賞 荒木 伶王 あらき れおん
「長い道のりも一歩から」

「いのち」って何だろう。一年前のある朝おじいちゃん（母方）は起きてこなかった。母は「あこがれのピンコロ」だと泣きながら笑っていた。ぼくは、さみしく、悲しかったけれど、周りの大人は「よかった」と言った。「なぜ？」しかも笑って。でもそれは、苦しまず、長く思う事なく旅立ったということらしい。「そんな考え方もあるんだな...」と。

ぼくにはもう一つ、忘れられない別れがある。それは四年前、ぼくが幼稚園の時の話だ。最近このことで母が余り泣かなくなったので、やっと書くことができる話だ。

その頃、ぼくの家にはエアデールテリアの「デビ君」がいた。ぼくが生まれて家に戻った時に、迎えてくれたお兄ちゃんみたいな存在だ。一緒に花見に行ったしプールも入った。サッカーもした。パンを横取りされた時は、思いっきりげんこつを、おみまいした。そんなデビはいつも、クサいうんちゆるゆるマン。もう長くそうだった。フードアレルギーの診断を受けていたのに、治らないゲリ。それを心配して、ある日、違う医院に連れて行った。そこで、すぐに大きい病院を紹介された。デビは、お腹に針を刺して、生体検査してきた日から、薬も飲んだのに、どんどん容態は悪くなった。検査結果は、延命するか、しないか、の二択だった。母は「生きさせたい」と父に相談した。父は「自然界では自分で何かできなくなれば死ぬのだから、延命は賛成しない」という意見だった。その中、母は仕事を抜けて世話をし、父も応えんしていた。「ひとりで死んだらあかんで」と声をかける日が続いていた。

ある日、デビ君が大好きな庭でランチをした。デビ、母、そしてぼく。お弁当のソーセージを取られたけれど、げんこつをおみまいしなかった。誕生日ケーキを皆で食べた。メッセージカードを作り、低い位置に見えるように貼った。その日から母はデビの横で寝た。もう、おしっこにも立てず、息も浅くなっていた。明け方、ぼくのあげたソーセージ、少し食べた肉と大量の血を吐いた。食べた物は一切消化されないままだったらしい。母はこの時「決心した」と後で聞かせてくれた。

両親は「幼稚園にいた間に、デビ亡くなったよ」と、ぼくにそんなウソをつくつもりだったそう。でもその日、ぼくはすぐに降園した。父は「もう、いいか？」母に再確認すると、デビ君をしっかりと抱いて「おつかれさま」と声をかけて、家の周りを見せ、車に乗った。医院で母は泣きながら、「また会おな」「ありがとう」「強かったな」「またな」と何度も何度も、何度も言っていた。デビ君が息をしなくなるまで、ずっと手を握り締めていた。ぼくは余りにも悲しかったので、しゃべることもなく、ただつつ立っていた。注射で筋肉が弛んだデビ君は、うんちをした。においがした。でも家族の誰も何も言わず、棺の中で眠るデビから出たうんちをひたすら拭いていた。読経の後、デビ君は係の人と行ってしまった。小さくなったデビを次は母が、しっかりと抱っこして帰った。「デビ君おかえり」と声をかけた時、もう夜だった。これがぼくの経験した「別れ」であり、それは「動物の安楽死」だ。現実には、家族であることを放棄された子や、行先がないその子たちの命は消えている。「おかえり」とも言われないままに。もしかしたら、いなくなることを気にもされてない。一方では、ぼくの家族がした「決断」と同じようなこともある。

「安楽」とは「苦痛からの解放」と辞書にある。ぼくは「安楽」に続く言葉を「死」ではなくしたい。それは一人でも多くの人が目の前の「命」が大好きで大切に思う「心からの行動」から始まるはずだ。「そうしていかなきゃ！」そう言うと「そんな簡単な問題ちゃうで！」と、まともや母のキツイ一言がきた。でもぼくは、そんなこと百も承知だ。